

第6回 技術ベンチャー養成ワークショップ 概要 (一般社団法人日本開発工学会)

2016年7月22日 午後6時半から8時半まで 東京理科大理窓会館会議室 作成：余田幸雄

1. 日本開発工学会 大江 修造 会長 挨拶

「大学発ベンチャーを創出する風土」に関し30年前化学工学会の場で何故日本の大学から優秀な技術が出ないのかと質問され米国等と異なり金儲けをしてはならないとの風土があるからだと答えたことを思い出す。東京理科大には清水荘平氏の北辰電機製作所の創設、ノーベル賞受賞の大村智氏の多様な創業の挑戦、特許博士伴五紀氏の特許2000件等の下地はあるが風土と言い切れるかどうかだ。

2. コーディネーターからの問題提起 余田幸雄

00年7月某IT大手のシリコンヴァレー責任者が当時日本のIT企業は既に完敗でありながら、本社は自前主義に立ち子会社は本社の下請けに過ぎないとの意識、子会社幹部は投資先(親会社)へのリターン最大を目標に主体的判断と結果責任で経営する意識の差を指摘し、また95年9月JAIC今原禎治会長が、米国では投資とリスク一体の経済活動の歴史を持ちビジネス感覚と売上げ拡大プロセスを学校教育しているが、我が国ではこのような起業家精神による事業立上げ殆どなく偏差値教育による優等生化と大企業志向が浸透していると指摘。講師の話も含め変化したのかどうかを考えたい。

3. 大学発ベンチャーを創出する風土—起業支援の大学同窓会活動と大学でのアントレプレナー教育を実践してきた立場から、大学発ベンチャーを輩出する風土について考える— (講師：宮地 恵美氏 (株)MMインキュベーションパートナーズ代表取締役 慶應義塾大学政策メディア研究科特任教授)

(1) 自己紹介と慶応大学湘南藤沢キャンパス(SFC)に合流するまでの経緯

①慶応のメンター活動の二本柱である(株)MMインキュベーションパートナーズ(MM：三田メンター。MMIP)代表取締役社長とメンター三田会会長代行を務めている。後者の会員約50名は大企業OB、若手ベンチャー、VCなど多様なメンバーからなる。設立10年経過し現在、ITの技術革新と関連する新規事業の増加に対応した支援活動の有り方の刷新に取り組んでいる。同時に慶應義塾大学政策メディア研究科特任教授等として産学連携の個別案件コンソーシアムに参加・組成・調整し、留学生の数学教育担当等の学内の立場にある。

②慶応大工学部の数理工学を専攻し3次元画像表示、並列処理等のプログラム開発を行う数学とIT大好き学生で、SEを男女同一の条件で採用し3次元CADをトヨタ向けに開発していたユニバックに就職。良きメーカーとの共同の開発を経験。00年頃にトヨタ、ホンダ、日産による次期CADシステム開発コンペが行われIBM・ダッソー組等との競争の結果、ダッソーのキャティアが採用。同社はCAD技術者を保守のみの別会社に移すこととしたので、システム開発でなくビジネスの勉強を希望、04年にユニシスがSFCとコンソーシアムを組みこれを担当したことで、慶応に関わるようになった。

(2) 慶応におけるインキュベーションとイノベーションの取組み、エコシステムと風土

①インターネット導入に奮闘していた村井純教授が米国と同様に大学発ベンチャーを産み出し支援するべきと考え01年にMMIPの前身の会社を創り、村井氏の大学理事就任に合わせて同窓会で株を引き取りMMIPとして発足。MMIPはインキュベーション施設運営、相談等の支援活動、少額投資、産学連携研究コンソーシアムの事務局等のインキュベーション、メンタリング等を行っている。

②慶応では福沢諭吉先生の産業振興・殖産新興・実業界との関わり以来の伝統が脈々と受け継がれていることを実感。産業を重視し新規事業を育てることが慶応の風土の原点。上山英一郎という卒業生が福沢諭吉に米国の種子屋を紹介され除虫菊の種を手に入れて実用化したキンチョー蚊取り線

香が良い例で、福沢先生は大学内研究から事業を産み出すよりも中央や地域で活躍する多くの卒業生を意識して彼らに情報や人を引き合わせビジネスを産み出していた、その思いが続いている。

③メンター三田会もこの延長にあり、04年7月に「慶應義塾は・・・今日まで、幾多の有能な人材を産業界へ送り出してきた歴史があり・・・慶應義塾のメンターは、塾生、塾員、教職員による新事業の創造を支援する」との趣旨の基に創設。同窓会活動としてボランティアで寄付金を募っている。

④大学周辺からベンチャーを産み出すためには資金、人材、教育等色々あるが、そもそものベンチャーを創りたいと思う根源的な思いが必要ではないかと考える。MMIPやメンター三田会、あるいはこれらを支える同窓会、更にはKIIというファンドもあるが、福沢先生の国を支えるのは独立自尊の精神であり、国から何かをして貰うのではなく自らが何かをして国を支えるという考えが明治以来次々と次世代に真摯に伝えられてきたことが大きい。また、慶応では学生起業家が法律に触れない限りその活動を応援する教員が多い。これは村井氏のインターネット導入に対し既存アカデミア等のクレームから村井氏を守った慶応の先輩の例のように教官が国に睨まれても頑張る風土があり、色んな意味でめんどくさいことに付き合っていくのも慶応の風土であると思っている。

(3)慶応の代表的ベンチャーの例とその起業家の特質

①スパイバー株式会社は環境情報学部の関山和秀氏、菅原潤一氏がクモの糸が新素材になれば面白いとのノリで関山和秀、水谷英也氏を誘い会社を始めた。最初は技術もビジネスモデルも無く誰も実現できていないアイデアをチャレンジ精神で実現するのが宿命だと進んでいった。富田教授も出来るか出来ないか分からないからこそその挑戦に応援するとの立場で、試験管の中で合成が実現し大手繊維メーカーの元研究所長等を招聘して技術化を図り、ある人に紹介を受けた小島プレス社社長が彼らの意気の評価し技術開発に参画。後に合併でエクスパイバー社を設立し量産化への一歩を踏み出した。ただ真面目に従来技術の延長で開発していたら突破できなかったと思う。大企業出身の技術者達も生意気な彼らに正面から向き合ってくれた点は立派だった。

②実際に、スパイバーその他の創業者である学生等を身近に見て感じるのは、結果的に成功している・やり切っている学生は、裕福と言うのではないが比較的に経済的に恵まれた家庭で幼少期に自由にやらせて貰える環境に育ったとの共通の要因が有りそうで、のびのびと根拠なき自信を持っている、特に幼稚舎から大学まで来ている学生は途中での受験の挫折を経験していない、このような共通の特徴を実感する。資質的にも優れているが、「僕はやる」と決めると怖いもの知らずで、突っ走れることが成功の要因として大きいと考える。

4 質疑

・学生のチャラさがシニアには素直に受け止められないが、真面目にやっているのは事実。ベンチャーや起業を考えた時に、余りに深刻に取り組み過ぎると結局長続きしないという点は大変重要。

・悲壮感がない明るさに価値がある。キチットしたビジョンを持って楽しく挑戦し続ける点を評価。

・今後の技術系ベンチャーの行き方として大手メーカー発の技術をチャライと言われるような形で具体化する、今までの研究開発指向型ベンチャーのように技術そのものの勝負ではなく一ひねりも二ひねりもしたビジネスプランを創ることが重要。MMIP、メンター等の活動が重要。

・根拠のない自信の重要性を慶応の学生はその雰囲気から知っているがそれが他に拡大できるのか。

・大企業では今CVCの構築がバブル現象。大企業での右倣え的ブームは長続きはしない。短期の業績指向で何事も1, 2年で冷めてしまうのが問題。他に選択肢が無く、追い込まれてやっている、自主的な先への展望が無いからやっているという感じが問題

5 最後に 小平 運営委員長 挨拶

風土の素晴らしさ、重要さが良く分かった。今まで本ワークショップの課題について、余田と議論していても暗い話が多かったのだが、元気よく挑戦する明るさが如何に大事かを本日の講演でよく理解した。次世代への希望を持てるかと思う。

以上